

絵画にみる潜在的動態表現願望

2019

真鍋友範

1 概要

中世末期から19世紀にかけての西洋絵画に内包する【時間推移の表現】、および作品に潜在する特徴的な4種の【動態表現願望】について考察する。

2 中世-動態表現の芽生え

画家が時間を表現する方法を、中世末期（イタリア・ルネッサンス黎明期）迄時間を遡って検証してみよう。

まず登場するのは画家ジョットだ。彼は、後に初期ルネッサンスへの扉が開かれるにあたって最初の契機となった画家だ。その彼がイタリア・パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂に描いた《聖母マリア伝》と《イエスの生涯の物語》に中世末期の動態表現願望の例がある。（図版1参照）

このフレスコ画はいわゆるキリスト教の教義を大衆に教える《物語画》として、聖母マリア伝やイエスの物語の各場面を、聖書の場面ごとに区切りながら観衆に対してストーリー解説している。

特徴は、各場面で単純に細分化された表現であるものの、ほぼ物語の流れに沿って描かれた静止画面だ。これらを順に見ることにより、途切れることなく続く聖書上の物語のイメージを見る人の脳裏に再現するという手法だ

ただし、現代のパラパラ漫画のように、動きそのものが展開する訳ではなく、物語前後の様子がこれらの表現から動態として連想可能なことから、これら一連の絵画を【集合画面による物語表現】と分類することにした。

西欧絵画では宗教を題材とする《物語画》として既に絵画表現の一分野

として定着しているおなじみの表現だが、一堂に連続して配置することにより、連続感のある動態イメージが強まる表現となっている。

文章に例えるならば、その行間に画面展開する途中の物語が挿入されることになる。つまり絵画を見る人は、描かれていない画面と画面を埋める物語の推移を脳内の想像領域で無意識に描くことが可能になるのだ。



図版 1

スクロヴェーニ礼拝堂内部 ジョット パドヴァ

次に登場するのは、画家マザッチョ(?~1428)だ。彼はメディチ家の繁栄した当時のイタリア・フィレンツェに生まれた画家だ。

彼を有名にしたのは、建築家ブルネレスキの発明した遠近法を最初に絵画に応用したという快挙だ。サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂にある彼のフレスコ画《聖三位一体》(1427)は、典型的な遠近法の作例としてよく引用される有名な作品だ。

そしてもう一点、忘れてはならない絵画作品が、サンタ・マリア・デル・カルミネ聖堂ブランカッチ礼拝堂の《貢ぎの銭》(1425)だ。(図版2)



図版 2

《貢ぎの銭》1425 マザッチョ

ブランカッチ礼拝堂 フィレンツェ

(画面の左外側に魚の口から金貨を採るペテロの様子が描かれている。)

では、解説に移ろう。重要な点は、この絵画に描かれている情景が、3つの異なる時間の宗教上の場面から構成されていることだ。

まず、イエスは税関から税の支払いを求められる。するとイエスは弟子ペテロに命じて魚を採るように命じる。最後は魚の口から取り出した銀貨を収税人に支払い、一行は無事税関を通過する、という3つの連続場面を同時に一舞の絵画上に表現している。

このような描法は、ギルランダイオの描いたフレスコ画《マリア伝連作》サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂に見られるが、もっと昔のジョットの作品や中世の作品にも同じように、異なった時間を同一の画面内に描き出す手法としてよく用いられている。(異時同図法)

そして、この絵画作品で重要な点は、この作品がルネサンス初期にレオナルドやミケランジェロに多大な影響を及ぼした点にある。

さて、その影響とは当時革新的な遠近法表現のみであったのだろうか。

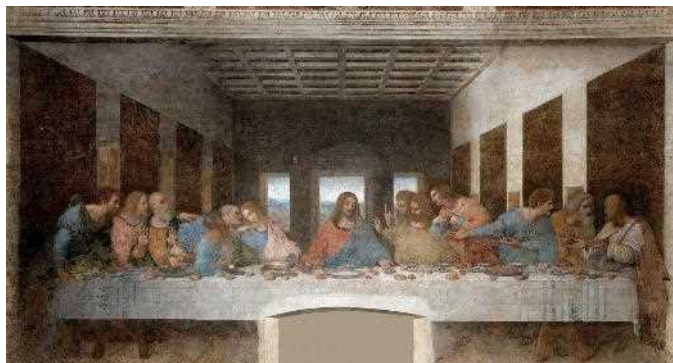
実はその影響の一つが新たな時間表現＝【帯時間表現】への第一歩である点が、これまであまり意識されてこなかった。

物語(＝ストーリー)が重要な宗教絵画においては、物語の展開を描く必要があり、この物語の展開こそ、画家がその表現に最大限工夫しなければならない重要課題なのだ。

当然なこととして、【物語の展開には帯時間が付随する】のだ。

次に、有名なレオナルドの《最後の晚餐》をあらためて鑑賞しよう。

この絵画では、スナップ写真のような一瞬ではなく、【帯時間】が存在する。(図版3参照)



図版3

《最後の晚餐》1495-98レオナルド・ダ・ヴィンチ
サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂 ミラノ

まず、イエスは晩餐の席の弟子たちに向かって、裏切る者が居ることを告げる。そのイエスの言葉は波のように周囲の弟子に伝わる。その動揺の内容は、弟子達の身体表現を通してひしひしと見る側に伝わる。

イエスの最初の爆弾発言から弟子達の一連の反応が生じる迄の時間は数秒間だ。【瞬間】ではなくこの数秒間の【帯時間】こそ、レオナルドが描き込みたかった内容なのだ。

レオナルドがかつてフィレンツェのサンタ・マリア・デル・カルミネ聖堂にあるマザッチョの《貢ぎの銭》から学んだ【帯時間】の古典的表現は、《最後の晩餐》の中で、より近代的に進化して再登場しているのだ。

ただし、この《貢ぎの銭》で表現されたマザッチョの【帯時間表現】と、レオナルドの段階の【帯時間表現】とでは、表現法が少々異なってくる。

《貢ぎの銭》では具体的な時間の異なる三場面が描かれている。(この表現は美術史上【異時同図法】*と呼ばれている。)

この時間表現【異時同図法】については、日本の絵巻物の中でも同様の表現があることがよく知られている。

3 15世紀～17世紀西洋絵画にみる時間表現

レオナルドの到達した【時間の帯】表現をバロック絵画で最初に表現した記念的絵画作品がある。

カラヴァッジョの《聖マタイの召命》(1600)だ。

この絵画は、呼び出されるマタイが絵画上のどの人物なのか謎であったのだが、小生はネット上の著作「眼鏡の聖マタイ」(2013年)の中でその謎を解き明かした。(図版4参照)



図版 4

《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ
サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂 ローマ

ここで明らかになった点は、この絵画が迫真的な写実性ととも、より論理的な【帯時間】を内包させるという、カラヴァッジョの卓越した表現技術が存在した点であった。

では、作品を鑑賞しながら、簡潔にその内容を解説しよう。

まず、カラヴァッジョが既存のデッサン帳に頼らず、実際のモデルを使って人物を描いた最初の画家、という事実を思い出さなければならない。あくまで彼には写実表現への強いこだわりがあったのだ。

この場面のストーリーは、室内に現れたイエス一行に対して、『探している人物は私ですか、それとも隣の男ですか。』と尋ねる髭の男の2段階の左手の身体動作に始まる。質問を受けたイエスは、開いた左手を質問者の髭の男に見せて許諾を伝え、次に眼鏡の男の顔が自身からよく見えるよう、自身の右足を一步横に踏み出す。さらに質問者の髭の男の目を見ながら、同時に右手を大きく上から廻すように半回転させて、目指す眼鏡の男の顔あたりで腕の先を止める。同時に一言つぶやく。「私に従いなさい。」

さて、この場面以降は脳内でイメージする動態画面だ。

呼び出されたマタイは、右手をテーブルに置いて寄り掛かった姿勢から、自身の上体を起こし、素直にイエス一向に従うのだ。

もちろん、この下線部分は次の展開部分だが、聖書の『マタイは立ち上がって』(he got up) という表現とも矛盾しないカラヴァッジョの繊細な表現部分だ。

この場面は、驚く程論理的かつ正確な時間順の連続身体動作で構成されている。

レオナルドとカラヴァッジョの表現上の差異は、イエスの発言の後か前かによる違いだけで、双方ともに【帯時間】が存在するのだ。

このように、時間にすればほぼ数秒間の場面であるのだが、そこに潜在する動画表現こそ、カラヴァッジョがルネサンスの巨匠レオナルドの《最後の晚餐》の【帯時間】表現を忠実に継承している証拠なのだ。

この表現の特徴は、登場人物各人の動作の時間的身体変化を順序だてて構築することにより、動画表現により近づく点にある。

さらにカラヴァッジョはバロック期の他の画家にも多大な影響を与えている。それらの中で特筆されるのは、ドメニキーノの描いた作品《ディアナの狩猟》だ。(図版5参照)



図版 5

《ディアナの狩猟》ドメニキーノ

ボルゲーゼ美術館　ローマ

狩猟場面を覗き見しながら隠れている右端の藪の中の男が、自身に向かってきた猟犬に発見され、吠え立てられている状況が描かれている。

さらにこの場面から連続する次のストーリーの進行を暗示している。

同時に、水浴するニンフが画面のこちら側に視線を送り、この絵画を見ている我々が、この妖精と視線が交われれば、画中の藪の中の男と同じ危機を迎えると意識させつつ、ストーリーの進行する空間に誘い込んでいる。

この絵画は、単純なニンフたちの弓矢が獲物に当たりディアナが歓喜している瞬間の様子を描いたスナップ写真のような静止絵画ではないの

だ。

狩猟のシーンでは、ディアナの侍女たちが放つ弓矢の動きが連続分解写真を構成することにより、観衆はこの絵画を動画のように感じるのだ。

つまり、【帯時間】と【異なる時空間】を同時に取り込んでいるという、極めて複雑な表現技巧を駆使した込んだ近代的感性の秀作絵画なのだ。つまり、作品の背後に流れるのは、レオナルドやカラヴァッジョが表現したのと同じく【帯時間】表現なのだ。

バロック期の巨匠といえば、スペインの画家ベラスケスの有名な作品《ラス・メニーナス（女官たち）》を鑑賞したい。（写真参照）



図版 6

《ラス・メニーナス》1656 ベラスケス

プラド美術館 マドリード

この場面は、国王夫妻の視線から見た、ベラスケスが王女を描いている場面であり、同時に女官たちが、王女がモデル役を上手にこなせる様に世話している様子が描かれている。美術評論では、鏡を使った空間構成が特徴であるとして解説される機会の多い作品だ。

しかし、詳しく見ると、より面白く重要な内容がこの絵画に描かれているのだ。

画面前方右隅に注目したい。ベラスケスは何故右側から走り出て、大型犬の背中を蹴り上げる少女(少年?)を描いたのだろうか。この場面が有る場合と、無い場合で何が異なるのだろうか。

この場面がなければ、この絵画はほぼ静止した情景の場面だ。しかし

この場面を描くことにより、次に発生する混沌となる場面を観者に暗示する内容に繋がるのだ。

つまり、ズバリ言うと【帯時間】表現なのだ。

次の場面では、驚いた大型犬が吠え始めると、驚いた周囲の人たちが、一斉に次の行動に移る様子が暗示されている。

吠え続ける大型犬を宥める女官、大型犬が暴れないよう制する女官、王女を守る為に駆け寄る女官、驚いた表情で王女に駆け寄る国王夫妻、そして、手に持つ筆を投げ出しそうになる画家ベラスケス。驚いた大型犬が室内を走り回り、その結果ベラスケスの描いている大型キャンバスが画架からはじき飛ばされるかもしれない。

つまり、この場面に連続する次のシーンを予感させる【帯時間表現】が、この絵画の魅力さをさらに向上させているのだ。

そして、動態表現への願望は、静止した絵画でありながら、静止することなく連続する動きの瞬間を表現する絵画を生み出すのだ。

それは【仰角遠近法】でローマ各所の聖堂の天井に描かれた絵画だ。

それらの中でも特に有名な作品の一つは、アンドレア・ボツォがローマの聖堂の天井に描いた《聖イグナティウス・デ・ロヨラの栄光》（1691-94）だ。（図版7参照）



図版7

《聖イグナティウス・デ・ロヨラの栄光》1691-94 アンドレア・ボツォ
サン・ティナーツィオ聖堂 ローマ

完成当時、この作品を聖堂の天井を驚嘆して眺めた人たちは、静止画ではなく、聖イグナチウス・デ・ロヨラがこの父なる神やイエスの聖なる光を受け、イエズス会士が世界へその教えを伝搬するという内容のこの動態を画面上に見ていたのだ。

つまり、この天井画は、動態の瞬間を捉えた表現であり、先に挙げた《異時同画表現》ではなく、《帯時間表現》でもない、当時最新の《動態を瞬間凝結させた表現》であったのだ。

人々は、動画のない時代であっても、脳裏に動態を強く意識し心に描きながらこの絵画を鑑賞したことだろう。

時代は下るが、有名なフランス・ロマン派の画家テオドール・ジェリコーの作品《メデューズ号の筏》（1818-19）は、多くの人の印象に残っている作品だろう。



図版 8

《メデューズ号の筏》 1818-19 テオドール・ジェリコー
ルーブル美術館 パリ

この絵画は、難破した船から逃れ、漂流中の筏に乗る人々が写実的に描かれている。よく見ると、水平線に現れた点のような救援の船（青い○内）に気付いた人々が、そちらに向かって呼びかける動作が見て取れる。

この絵画には、現実の凄惨な筏の場面と同時に、次の段階での救難シーンが、イメージとして観衆に想起されるように描かれている。

つまり、この場面にも【帯時間】表現があり、観衆は、絵画に描かれているこの場面と同時に、救援される人々のイメージ画面の双方を鑑

賞していることになるのだ。

4 おわりに -動画表現への潜在的願望-

さて、これ迄見た例のように、中世末期からバロックを経て19世紀ロマン派に至る西欧絵画の中で繰り返し表現される【4種類の時間表現】をまとめよう。

1 【集合画面による物語表現】

例：キリストの生涯 ジョット

2 【異時同図表現】

例：貢ぎの銭 マザッチョ
：マリア伝 ギルランダイオ

3 【帯時間表現】

例：最後の晩餐 レオナルド・ダ・ヴィンチ
：聖マタイの召命 カラヴァッジョ
：ラス・メニーナス（女官たち）ヴェラスケス
：メデューズ号の筏 ジェリコー

4 【動態瞬間凝結表現】

例：聖イグナティウス・デ・ロヨラの栄光
アンドレア・ボツツォ

総合すると、中世末期から19世紀の絵画表現において、人々が見たいと願う潜在的な動態表現の願望が隠されていたと考えられる。

当時の人々も現在の我々と同様に、静止した絵画面上に動態を重ね見ているのだ。画家は当然のこととして、その鑑賞スタイルをイメージして、画面を構築し提供してきたのだ。

中世末期の【集合静止画面による物語表現】では、まだ動態表現への願望は曖昧であるものの、連続させて配置することにより、動態表現に似た効果を生じさせている。

ルネサンス初期の【異時同時表現】はバロック初期の【時間の帯表現法】に発展し、さらにバロック最盛期の【瞬間動態凝結表現】を経て、動態そのものである映画の発明に繋がっていった。

映画は19世紀前半の写真技術を応用して、19世紀後半に誕生したが、その素地は、【数世紀にわたる画家の絵画上での動態表現願望】の蓄積とその延長線上にあったと考えられるのだ。

もちろんその表現の根底にあったのは、まさしく人々の潜在的な動画表現願望であったことは言うまでもないだろう。